

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	歌三首 : 文苑
Author(s)	鳴鶴
Citation	龍南會雜誌, 3 : 18 - 19
Issue date	1892-01-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/3745
Right	

感秋林 (原晚唐姚倫の作)

嘯月庵主人

赤根さず

東の方を

眺むれば

みどりの林も

もみじして

うつろふ秋の

いと深く

落つる木の葉れ

音しげく

梢にかゝる

鳥の巢も

さみしき影の

ものすこく

すみたる空に

飛ぶ雁の

羽さへ見へて

秋の夜の

月に驚く

鳥かや

嗟霜のあした

吹く風も

長閑けき春や

匂ふ日も

代りゆくなる

世のためし

榮枯の夢の

さてもあさよし

返歌

吹く風にちぎしく秋れもみじばは香ひ榮へし春は花かな

病褥中に諸學友の屢來訪せらるし厚情に感じて

鳴鶴

かねてより深き情は知るなから猶こそ見ゆれかゝる折には

又

同

幾千尋ろこひ知られぬ渡津海もまかしとぞ思ふ君の心に

歳 暮

同

日毎く事のいろきにろこすまにいつしかきぬるとしの暮かな

白虎隊

外員

杉村英夫

(三重韻)

一

名も岩しると聞くからに

思ひこそすれ遠永に

さはいへ月も烏玉に

今日はこちふくさ嵐に

城は巖に幾春も

誰か嵐の吹くそと毛

變るや秋の霄のくも

消ゆるは悲し知るとても

榮ゆる色の若松と

知らむや變る色なると

昨日千歳の色れあと

是や浮世の習そと

二

はや傾きし旗のいろ

色若松の守りしろ

散りてかばしき花のいろ

消えて越路の空のいろ

かへす力もなく人の

いざ言寄せん敷嶋の

吹かはしるさや白河の

雪うと紛ふ幾萬の

涙は染みて枯を初めし

櫻は胸に小夜あらえ

關の守りは曉のはし

敵は二手に旗しるし

三